

「建德的著作」再考

—『二つの建德的講話』をめぐって—

舟木 讓

問題の所在

1. 「建德的著作」⁽¹⁾の取り扱いをめぐって

これまでの「宗教的著作」に関する研究⁽²⁾によって、キェルケゴール研究に大きな示唆が与えられ、キェルケゴール自らが「天才的」⁽³⁾と呼びうる叙述の才が明らかにされてきたことは、その研究史⁽⁴⁾をたどると明らかである。しかしそれにも関わらず、キェルケゴールの著作中、「建德的著作」の範疇に入れられたものに対する評価は、現在においても必ずしも確定しているとは言えない。その原因の一つとしてあげられるのが、キェルケゴール自身が、最初の「建德的著作」となる『二つの建德的講話』<序言>において「大きな森の中の人知れぬ所に咲いた小さな花」⁽⁵⁾と謙遜して語り、仮名著作に見られるような論争的な文体が後退し、仮名著作との比較において鋭敏さにかける点⁽⁶⁾である。また、同じ箇所、キェルケゴール自身がその著作を「建德のための講話と呼ばずに建德的な講話」⁽⁷⁾と呼んで、「建德的著作」が一連の「仮名著作」ほどの論争の契機を読者に与えないかのような控えめな表現がなされている。それ故、ともするとあまりにキリスト教的であって、かつ内容的にも文体的にも「論争的でない」態度から、「仮名著作」と対等の弁証法的関係に置かれる著作⁽⁸⁾として認められず、仮名著作を補完するための付属物的な役割と理解されてきたところが見受けられる⁽⁹⁾。しかしながら『視点』において、自らのことをあくまで「宗教的著作家」であると称し、その活動の展開を「いかにしてキリスト者となるかという『問題』を提起し」「体系や思弁的なものなどから離れ去ることによってキリスト者」となる道

(1) キェルケゴールの著作に関する分類は各研究者によって異なり、また「建德的著作」の範疇も異なるが、本稿では下記の著作の分類を前提とする。

橋本淳『背後から傷つける思想』新教出版社、1976、「解題」189-193頁。

(2) Cf. Gregor Malantshuk, *Dialektik og Eksistens hos Søren Kierkegaard*, København, 1968.

(3) Pap. X 1A, p. 266.

(4) 大谷愛人『キェルケゴール著作活動の研究（後編）』勁草社、1991、1256-1283頁に詳細な研究史があるが、研究史に関しては、本稿では言及しない。

(5) SV XIII, p. 5.

(6) SV XIII, p. 528. 「『二つの建德的講話』はだれからも深い意味において注意を向けられたことも念頭に置かれたこともなかった」と『視点』においてキェルケゴールが落胆しつつ自ら語るように、出版当時、他の仮名著作とは人々の受け止め方が大いに異なっていたことが分かる。

(7) SV XIII, p. 5.

(8) G. Malantshuk, op. cit.

(9) SV XIII, p. 528. 「私は左手で『あれかーこれか』を差し出し右手で『二つの建德的講話』を差し出したが全ての人々、あるいは多くの人々は右手で私の左手のものをつかみ取った。」

「建德的著作」再考（舟木）

を叙述しようとした⁽¹⁰⁾、と語るところから鑑みて、一連の「建德的著作」においてなされる直接にキリスト教的な表象を用いた叙述ならびに、自らの実存体験をも色濃く反映した著作である「建德的著作」をキェルケゴールの意図に沿って——あるいは結果としてそれがキェルケゴールの意図とは異なったとしても——、彼自身の残した資料を基に精緻に解釈することは、キェルケゴール研究の文献学的な再構築が進められている今日において肝要なことと言いうる。

そして、従来、「仮名著作」の有する迷宮的な間接的真理伝達の方法と、より直接的な真理伝達に近い「建德的著作」の双方が弁証法的に関係づけられた上で理解されねばならぬ事は、多くの研究者の一致する見解ではある⁽¹¹⁾が、その際、両者が対等に弁証法的な関係において対等な意味を有して存在しているとの認識のもとに、今一度それぞれの関係するところを理解していく必要があると思われる。

しかしながら、これまでの研究においては、キェルケゴールの全著作の構造が「弁証法的原理のもとに形成されており、それ故にその全体もまた有機的な弁証法的構造連関をなしている」⁽¹²⁾という点に重点を置くあまり、「建德的著作」を取り扱う際にもキェルケゴールの個人史ならびに内面史に距離を置きすぎてきたと思われる。特に、レギーネとの関係を全体に想起させる『二つの建德的講話』においてさえも、弁証法的関係に置かれてある『あれか—これか』との関連を前提としすぎる中で、「ただ、ある一人の人」という言葉の解釈に、後にキェルケゴールの思想の中でも重要となる「単独者」概念を、後年のキェルケゴールの思想から演繹するような仕方で取り扱ってきた感は否めない。その結果として、キェルケゴールの思想に対する革新的解釈を行った、E. ヒルシュのキェルケゴール著作の分類方法⁽¹³⁾ならびにその思想解釈に対してもキェルケゴールの内面史に影響を受けすぎているとの批判が当然のこととして行われてきた⁽¹⁴⁾。しかし、一人の人間の精神史が首尾一貫していることは極めて希なことであり、著述生活の歴史において惹起する様々な事柄とそれによる実存的内面の変遷の中で、それと密接に関係する著述態度が変化する事は必然と言えよう。特にキェルケゴールのように自らの実存に正面から向き合い、また深く沈潜し、そこから自らの思想を紡ぎ出そうとする思想家において、その傾向はより大きいと言わざるを得ないのである。

それ故、「建德的著作」の研究において、ともすれば看過されがちなキェルケゴールの精神的背景とその時々の変化、変遷に今一度留意しつつ、その解釈に取り組む

(10) SV XIII, p. 517-518.

(11) SV XIII, p. 521-522, e.g. G. Malantshuk, op. cit.

(12) G. Malantshuk, op. cit. p. 292.

(13) Emanuel Hirsch, *Kierkegaard Studien. Bd. II. 3 Heft.*, Gütersloh, 1933. p. 3-354.

(14) 大谷愛人、前掲書、1264-1265頁。

事がキェルケゴールの「建德的著作」を取り扱う上であらためて重要な問題となり得よう。

2. 著作の一貫性の問題

問題の2点目として留意すべきことは、先述したようにキェルケゴールの全著作活動の一貫性に関する点⁽¹⁵⁾である。特に、著作活動の準備段階ならびに著作活動の端緒から最後に『瞬間』という形をとって「教会闘争」を行うこととなった晩年に至るまで、デンマークの教会とそこに連なる人々の実存、あるいは激変する「解体の時代」⁽¹⁶⁾のなかにある当時のデンマーク社会を当初より透徹した理解のもとにおいた上で、彼がその全著作活動を進めたか否かという点である。

先に、これまでキェルケゴールの全著作活動がその当初から晩年に至るまで、一貫した「有機的な弁証法的構造連関」を有していると通常考えられてきたと述べた⁽¹⁷⁾。確かにキェルケゴール自身は自らの「仮名著作」と「建德的著作」の間には「弁証法的二重性」⁽¹⁸⁾が存在すると語り、また、「私は一個の天才であり、天才は摂理に反しても完全に直接的個人的に著作活動に携わることになる」⁽¹⁹⁾と語るほどに、自らを特別な人間と認識している。しかし、将来にわたる自らの思想的、個人的変遷⁽²⁰⁾を予想してその全著作活動を行うことは、通常、極めて困難と言い得よう。

実際、著作活動が始まり、多くの影響力を人々に与えた後にも、キェルケゴールは、1848年4月19日、いわゆる「宗教的突破」を経験し、そこから彼自身、「存在全体の変化」とそれに伴う「新しい直接性」の希求⁽²¹⁾を感じ、以後、その著作はキリスト教の高次の要求をより峻厳に突きつけるものに変化していく。また、その後も、「コルサー紙」事件という予測しない事態に遭遇する事を通して、著作活動の初めより取り扱われた「単独者」概念もこれまでにないより一層の厳しさを増したものに変化し、やがて『瞬間』を通しての「教会闘争」へと発展していったことは周知の事実である⁽²²⁾。それに比して、キェルケゴール自身は、そうしたデンマーク国教会ならびにそこに集う人々の本質を予見しておれば引き受けなかったと思われる、教会における説教と講話を実際には行っている⁽²³⁾。

(15) Pap. X 3A 308においても『二つの建德的講話』序言において使用された「単独者」の範疇と、『さまざまな思いでの建德的講話』献辞において用いられた時の差異が語られている。

(16) SV XIII p. 605.

(17) G. Malantshuk, op.cit. p. 292.

(18) SV XIII p. 555ff.

(19) Pap. X 1A p. 266.

(20) 象徴的なこととしてルターに対するキェルケゴールの態度変化があげられる。詳細に関しては、以下の論文参照。

林忠良「キェルケゴールのルターへの言及」『論攷 キリスト教学研究』（関西学院大学）XI、1991。

(21) Pap. VIII 1A, p. 640-641.

(22) 橋本淳『逍遙する哲学者—キェルケゴール紀行—』新教出版社、1979、244-274頁参照。

(23) Anders Kingo, *Den opbyggelige Tale*, København, 1987, p. 151.

「建德的著作」再考（舟木）

それ故に、キェルケゴール個人の名を冠し、実存を公的に明らかにした一連の「建德的著作」には、当初彼が予想しなかった、自らを取り巻く状況の変化、あるいは自らの実存的内面の変化がより多く反映された形で存在していると言い得る⁽²⁴⁾。そこで、こうした特徴を有する「宗教的著作」、中でも「建德的著作」をキェルケゴールの全著作の枠組みから一旦取り外し、その時々彼の思想的変化ならびに懊悩と対峙させ、その実存の変遷ならびに起伏、濃淡を「同時代的」に読み解いた上で再びその枠組みに戻すことによって、彼の全著作の底流にあるものをより正確に抽出する事が可能となると考え得る。そして、一連の著作が成立する際の、また、著作公刊後のキェルケゴールの内面の変化を、特にその日誌記述等との関係性の中で辿る必要性があると考えられるのである。

そうした作業を通して明らかになるのは、キェルケゴールの実存の苦悩と揺れ、そして変化であり、その変遷を辿る中で、キェルケゴールのたどった精神的軌跡と、その揺れに対峙してなされたその時々真摯な自己省察と、そこから彼のたどり着いた地平である。さらに、そうして到達したキェルケゴールのその時々思想がいかに関接に著作と関係しているかが自ずから浮かび上がって来ると言えよう。

したがって、以上の2点に留意した上で、本稿では、「建德的著作」として最初に上梓され、レギーネとの関係がその著作中、最も色濃く反映されている『二つの建德的講話』の再考を試みる。ここには、キェルケゴールが、自らの著作活動全体を見通すことを願いながらもそのことに困難を覚え、また、レギーネとの関係における内奥の傷がまだ癒えぬことに起因するキェルケゴールの実存の危機と、また同時にそこからの救いを希求する呻吟が見え隠れしている。本稿においては、最初に『二つの建德的講話』の成立過程をたどり、その後、「信仰の期待」の前半部を概観し、日誌記述等との関係の中から抽出される、著作活動開始時のキェルケゴールの「信仰」理解ならびに「建德的著作」の有する性格を概観することを目的とする。

I. 『二つの建德的講話』成立の背景—レギーネとの関係から—

『二つの建德的講話』が、先に公刊された『あれか—これか』と弁証法的関係にあることはキェルケゴール自身も語り⁽²⁵⁾、これまでも語られてきているし⁽²⁶⁾、そのことに異議を差し挟む余地はない。また、講話中で示される「ただある一人の人」という概念が、『あれか—これか』において審美的生活における最初の直接性を失い深

(24) Cf. Pap. X 1A p. 266.

(25) SV XIII p. 525-526.

(26) E. Hirsch, op. cit. p. 23-28.

い虚無と絶望に陥っている「審美家 A」を暗示し、講話において「信仰」を待望し宗教的生という選択肢を「審美家 A」に指し示しているという指摘も首肯し得る²⁷⁾。しかし、執筆当時を振り返ったキェルケゴールの日誌記述には、レギーネを意識した彼の懊悩が記述されてある。その当時のことを知る手がかりの一つとして、1849年の日誌に残された、『あれかーこれか』についての次の記載に留意したい。

「……(前略)……私個人の立場からすれば、わたしの著作活動は宗教的なものとは見なし得ない。一例をあげるとすると、私が【宗教的に規定されて】著作活動をはじめたのは事実である。しかし、それは別な意味で理解されねばならない。『あれかーこれか』の中で特に〈誘惑者の日記〉は、彼女のために書かれたのであり、私との関係から彼女を逃がすためにである。……(後略)……」⁽²⁸⁾ (引用文中の「……(前略)……」「……(後略)……」ならびに以下で出てくる「……(中略)……」は全て引用者による)

またさらに『二つの建德的講話』の背後に、レギーネとの関係に終生こだわり続けたキェルケゴールの苦悩が存在している事を端的に示すものとして、彼の日誌中「私の人生の展開」と題した記述の中に、『二つの建德的講話』の〈序言〉に関する次の記載が残されている。

「ソクラテス的なものにより、私が大変影響を受けていたとはいえ、さらに、わたしの本質の全内容が『単独者』⁽²⁹⁾の範疇を熟成させたものであったにせよ、最初にその語を用いた時、1843年の『二つの建德的講話』の序言では、私にとって純粋に個人的な意味を有するものでしかなかった」⁽³⁰⁾

また、同じ箇所でもレギーネとの婚約破棄問題を「神の前での純粋に個人的な問題」と表しているところからも、この講話においては、キェルケゴール自身の極めて個人的な実存体験が看取出来るはずである。また、時に文学的・審美的に、時に哲学的に語られる仮名著作の体裁よりも、「特別な等級のキリスト者ではない」⁽³¹⁾が、自らの課題を「キリスト教を描き上げる」⁽³²⁾事であり、「描く内容はキリスト教である」⁽³³⁾とキェルケゴール自身が自己を理解するところからもキリスト教的範疇の中で語られる「建德的著作」にはキェルケゴール自身の思いがより自然な形で発露していると言え

(27) Pap. X 1A p. 266. 大谷愛人、前掲書、1307-1308頁。

(28) Pap. 1A p. 266.

(29) SV XIII p. 644.

(30) Pap. X 3A p. 391.

(31) Pap. X 2A p. 61.

(32) Ibid.

(33) Ibid.

「建德的著作」再考（舟木）

よう。

さらに、後年当時の著述事情を回顧した前述の日誌において、彼は、この講話が後の著作物と異なる点を次のように記す。

「……(前略)……生来私は、論争的な人間であり、『ある一人の人』という語句においても以前は論争的なものとして取ってきた。しかし、最初にく二つの建德的講話において>それを記したときは、何よりも私の読者を指示した、なぜなら、その本は彼女に対してちょっとした目配せをその内容とするものであったからである。それ故、その時点において、この言葉は、本当に私にとって極めて個人的であり、ただ一人の読者を私が求めるという事でしかなかったのである。……(後略)……」⁽³⁴⁾

以上の点からも明らかとなるように『二つの建德的講話』に関しては、『誘惑者の日記』⁽³⁵⁾とともにキェルケゴールのレギーネとの関係を考慮しつつ取り扱われる事が不可欠と言い得るのである。

Ⅱ. 「表題」から「祈り」に見られるキェルケゴールの内奥

端的に『二つの建德的講話 (De opbyggelige Taler)』と記されたこの講話は、キェルケゴール自身の名が本名で明記され、続いて本書が父ミカエルに捧げられるべき事が献辞として指示される。自らを幼児より特殊な教育法で養育した父に対するキェルケゴールの思いは、心中複雑なものがあったと思われるが、その点に関して次のような回顧が日誌の中に見られる。

「私は、最も深い意味において不幸な個性の人間である。ごく幼児より、狂気の際にまで追いやられる苦しみの数々、その深い根源を私の心と身体との不均衡に負うと思われる苦痛へとしっかりとつながれていた。……(中略)……一人の老人、彼自身が極度に憂愁だった<その原因は書きたくない>、この老人が年老いて息子を持つこととなる。その子は父の憂愁をすべて受け継いだのであった。……(後略)……」⁽³⁶⁾

父から受け継いだ憂愁と特殊な宗教的教育によって一般の人間が躊躇無く甘受するはずの生を、直接に受け止めることが適わず⁽³⁷⁾、その結果、レギーネという最愛の他者をも不幸へと追いやる事となったにもかかわらず、その「不幸な」出来事から生まれた著作をそうした結果を招く大きな要因となった父親本人に捧げるとは首肯しが

(34) Pap. X 1A p. 266.

(35) Ibid.

(36) Pap. VII 1A p. 126.

(37) Cf. SV XI p. 71-73.

たい事である。その事情を解く鍵として「私自身のことで、絶えず明らかにしておかねばならない幾つかの事」と題された次の日誌記述があげられる。

「私が何か特別な等級のキリスト者であるところまで主張したことはないし、実際主張もしない。そのかわりに、私には、空想力や情熱が備わっている。……(中略)……他方、人間としてのありふれた条件すらも私から隔てられていたにも関わらず、その反面、別な意味において特別なものが私には備えられていた。……(中略)……確かに私は、ある点においては、偉大な能力によって装いを与えられ、幼児よりキリスト教の中で育てられたばかりか、そのためのいかなる条件にも恵まれていたのである。それ故、私の課題は、キリスト教を描きあげる事となっていた。……(中略)……その上に私はあまりに厳格にキリスト教へと教育されていた。……(後略)……」⁽³⁸⁾

以上の記述のあと、さらに「自らの人生を宗教的に理解することによって、私の心は徐々に和らぐようになった」との表現が続き、父親から受けた教育がキェルケゴールの天賦の才を開花させるに足るものであり、今まさに、宗教的著述家として本来自らがあるべき姿として存在していることの一因として、父親の存在を認識していることが分かる。それ故に「建德的著作」を上梓するにあたり、それを可能とする才をキェルケゴールの中に養い、キェルケゴール自身にあるべき実存を覚醒せしめ、また誘った父への献辞がなされるにいたったと言えよう。

表題ならびに献辞に続いて、他の多くの「建德的講話」同様、「序言」ならびに「祈り」が記される。「序言」において、この著作がきわめてキリスト教的ないしは教会的な表現に満ちているにも関わらず「説教 (Prædiken)」でなくあくまで「講話 (Tale)」にとどまり⁽³⁹⁾、また、「建德のため」ではなく「建德的」な「講話」と呼ぶ理由が「説教する権能を有しない (uden Myndighed)」ことにあることが強調される⁽⁴⁰⁾。さらに、「あの一人の人に」という表現を用いて、レギーネを念頭においた著述であることも暗示的に示唆される⁽⁴¹⁾。

続く本文の最初に置かれた「祈り」の内容からは、当時のキェルケゴールの信仰理解を看取させる内容が記される。この祈りは、表題が示すとおり、本来、元日の祈りであるにもかかわらず、内容としては、「弁明」と「憐憫」を乞う祈りが続く。ここには、キェルケゴール自身が自己をあくまでも「一人の懺悔者」⁽⁴²⁾と理解し、また実際、レギーネとの婚約解消によって、「人生の根本的な傷と痛みを今一度引っ掻くこ

(38) Pap. X 2A p. 61.

(39) SV X p. 320.

(40) SV III p. 15.

(41) Cf. Pap. X 1A p. 266.

「建徳的著作」再考（舟木）

とで、さらにひどいものとしてしまった」⁽⁴³⁾ 己が、そのことから目を背けて一般的な赦しや、祝福を請う事に対する大いなる躊躇が見て取れる。そしてまた、ここには、後に「宗教的段階 B」をキェルケゴールが考えたとき、信仰の獲得が「飛躍」によってしか得られないものであることを示唆したように、人間的な努力によって得られるものや、人間的な幸福状態は神の祝福と等価でないことが、人間の徹底した無力さと神の超越性によって示され、神への無私の信頼のみを呼び起こすことが祈られる。

Ⅲ. 「信仰の期待」（前半部）における「信仰」

ここでは、序言で記された「ひとりの人」という言葉が、先述のように重層的な意味合いをもって登場する。その示唆するところは、『あれかーこれか』において絶望の淵に立たされた「審美家 A」、レギーネ、そしてこの講話に接する読者一人一人である。

また、愛する人に「たった一つばかりの願い事をかなえることも出来ず」「途方に暮れている」⁽⁴⁴⁾ 人が、「信仰」を求め途中で遭遇する矛盾と困難さに関する言及が、幾度となく繰り返される。ここには、まさにキェルケゴールがレギーネとの婚約を解消してまでも貫かねばならなかった彼の真の実存への決断と、決断後にも日々襲い来る悔恨と逡巡、そして懐疑の思いが投影されていると言えよう。実際、婚約解消前後におけるキェルケゴールの日誌にはその決断が引き起こすであろう様々な影響と、そこまでしてでも踏み切らざるを得ない理由等が以下のように綿々と綴られる。

「お前は知っていなければならない、彼女の他には誰も愛さなかったことを幸福とし、他の誰をもはや愛さないことに誇りをかけていることを」⁽⁴⁵⁾

「……（前略）……私は彼女を愛する——彼女は私のものである——彼女の切なる願いは私が彼女の下に居続けることであり、家族も同様に懇願する——そして、それが私の最上の願いでもあるのだ——しかし、私は、否と言わざるを得ない……（後略）……」⁽⁴⁶⁾

「……（前略）……彼女はその最も厳粛なる瞬間に私の良心を殺す罪を負わせる。……（中略）……その時から私はへりくだり、しかし最大の力を発揮して、イデーに仕えるよう自らの人生をささげてきた。」⁽⁴⁷⁾

(42) Pap. X 1A p. 267.

(43) Pap. VIII 1A p. 422.

(44) SV III p. 21.

(45) Pap. III A p. 160.

(46) Pap. III A p. 161.

自らの最愛の人に対する誠実さを尽くすためには、その結果、最愛の人を不幸へと追いやることとなるという大いなる矛盾の中で、キェルケゴールは「真の信仰」獲得の困難さと「信仰」の範疇が他の何ものにも変えられない特別のものである⁽⁴⁸⁾ことを「信仰」の属性は「極めて矛盾に満ちたもの」⁽⁴⁹⁾であり、「信仰を有している人は他者へのつまづきを顧慮して信仰を誉め称える事はせず」⁽⁵⁰⁾信仰を有さない者は「信仰を讃えることは出来ない」⁽⁵¹⁾とする。そして、信仰を有する人が他者へのつまづきを考慮する理由として、信仰には「人知れぬ苦痛が伴い、この苦痛は他のいかなる苦痛にもまして、人を孤独にする」⁽⁵²⁾と述べるのである。

ここには、キェルケゴール自身が自らのイデーに忠実であることから、レギーネとの婚約破棄へと決断をし、その結果、誠実であったが故に「欺瞞者」⁽⁵³⁾の汚名を受け、さらに、将来にわたっても文字通り「孤独」の中で生きることを余儀なくされることの実存的体験が反映されている。さらにここでは、信仰が「教育されて」⁽⁵⁴⁾獲得されるものでなく、個々人の主体的な覚醒によって獲得され、しかも絶えざる反復の運動によってのみ獲得されると続けられるのである。そして、信仰の獲得こそが、不安と不確実性に溢れる未来を克服する力となる、というように結論づけられ、続く「信仰の期待」後半部で、未来と信仰の関係が詳述されることとなる。

結 び

以上のように、キェルケゴール自身の「信仰」理解は、自らの度重なる実存的危機との絶え間ない格闘から醸成されてきたことがあらためて看取される。さらに、幼少期より父親から受けた特別な教育もあいまって、自らを「一個の天才」⁽⁵⁵⁾と自覚しながらも、終始、他とは異なる違和感と孤独感にさいなまれつつ、真の実存を希求し続けた、一人の求道者にして「単独者」であり続けたキェルケゴールの実像が明らかとなる。そして、自らの特殊な才を最大限に用いる術として、著述家の道を主体的に選び取り、個人的な実存体験を一旦普遍化して、それを読む一人一人が自らの内に個人的な問題として受け取り直すことをキェルケゴールが意図したことが改めて分かる。しかしながら、そこには、当初より透徹して、首尾一貫した計画の元にその著作活動

(47) Pap. VII 1A p. 126.

(48) SV III p. 22.

(49) Ibid.

(50) Ibid.

(51) Ibid.

(52) Ibid.

(53) Pap. III A p. 172.

(54) SV III p. 24.

(55) Pap. X 1A p. 266.

「建徳的著作」再考（舟木）

を進めたものでなかったことも明らかと言えよう。

きわめて個人的な実存体験を通して、その度ごとに真摯に自己に向き合うことから真の「信仰」への扉が開かれることを、キェルケゴールは特にその初期の「建徳的講話」において、自らその時々苦悩と格闘することで紡ぎ出した世界を伝達することによって示したと言えよう。それ故、「建徳的講話」を理解する上においては、本稿の「問題の所在」において定義した、「一旦全著作の枠組みから取り外して」、各「講話」とその背後にあった彼の内面的葛藤をより密接に関係づけて解釈することが必要と言えよう。本稿では、該当箇所全体を俯瞰するにとどめたが、「序言」「祈り」そして本文に対する、以上のような作業を前提とした積義的な再考察の必要性は、より高まったと考えられる。

*キェルケゴールのテキストは、『原典全集（第2版）』（略号、SV）を用い、適宜『批評的新版全集』を参照した。また、『日誌・遺稿集』は、『日誌遺稿集（第2版）』（略号、Pap.）に依る。